

## 東海大学教養学部芸術学科音楽学課程所蔵の鍵盤古楽器とその活用

クラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノ、パイプ・オルガン

松本奈穂子\*

- I.はじめに
- II.東海大学芸術学科音楽学課程所蔵の鍵盤古楽器
- III.活用事例
- IV.おわりに

### I. はじめに\*

本稿で扱うクラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノ、パイプ・オルガンはいずれも一般の日本人にとって身近な存在とは言い難い。ピアノを学ぶ学生でも一生これらの楽器に触れる機会が無いことが殆どである。

バッハやモーツァルト、ベートーヴェンなど大作曲家の作品がモダン・ピアノで演奏される機会は大変多く、義務教育における鑑賞教材として指定されている楽曲も多々あるが、実際にこれらの作曲家の時代に使われていた鍵盤楽器の演奏に触れる機会は少なく、触れることができる場所も親しみ、知識を深める機会もなかなか無い。こうした機会を提供する重要性に触れた論文に小岩；平野 2007 や松居 2022 などがあり、近年こうした研究・教育展開はさらに増える傾向にある。

幸運にも上記の4種鍵盤楽器を演奏する機会に恵まれたとしても指導者はモダン・ピアノのそれに比べて圧倒的に少ない。CDやDVDが添付された独習用教材はいくつか存在し出版されているが、これらの古楽器は規格化製品ではないため個体差が大きく、各楽器の性能および個々人の能力に応じて行われる指導には及ばない。



写真 I-1. 東海大学教養学部芸術学科音楽学課程所蔵の鍵盤古楽器（筆者撮影）

東海大学は多種多様の学びを学生に提供している。同大学教養学部芸術学科では、質の高い音楽芸術教育の一

環としてピアノやエレクトーンなどの他に様々な時代の作品と演奏法を学ぶためパイプ・オルガン、チェンバロ、フォルテピアノ、クラヴィコード等各種鍵盤古楽器が設置され<sup>1)</sup>、各楽器演奏家により実技教育が行われてきている。鍵盤楽器ではないがヴィオラ・ダ・ガンバの教育も充実しており、これまでに国内外で活躍する演奏家を輩出してきている。これら貴重な古楽資源を用いることで東海大学が古楽の普及を含めた芸術文化の活性に貢献する潜在能力は極めて高い。

写真 I-1 はこれらの楽器を一同に並べたもので、向かって左からクラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノ、奥に見えるのがパイプ・オルガンである。本稿ではこれら所蔵楽器の概要と指導講師陣を概観後本学における活用事例の中から地域貢献および教育研究を中心に述べ、これらの楽器の可能性を考察する。

## II. 東海大学芸術学科音楽学課程所蔵の鍵盤古楽器

### II-1 クラヴィコード

クラヴィコード (clavichord[英]、Clavichord、Klavichord[独]、clavicorde、manicorde[仏]、clavicordo、clavicordio, sordino[伊]他)<sup>2)</sup> は 16 世紀から 19 世紀初頭にわたりヨーロッパで広く用いられた打弦の弦鳴楽器で、モノコルドより発展したとされている。クラヴィコードはタンジェントが下から弦を突き上げることで発音される。ペーピング *Bebung* といういわゆるヴィブラート奏法が可能である。山野辺はクラヴィコードの特徴として「音の強弱が出る」ことと「音を伸ばしている間、指が音に直接関与している」ことの二つを挙げている (山野辺 2015: 32-33)。タッチにより発音が大きく変わる繊細な楽器であるため、適切な奏法の習得を要する。この楽器で訓練された指のコントロールは他の鍵盤楽器演奏にも良い作用をもたらす。クラヴィコードの語彙が最初に認められるのは 1404 年の『ミンネ・リーガル *Minne regal*』、最古とされる図像はドイツ北西部で発見された 1425 という年号彫刻のある祭壇飾り壁のレリーフである。アンリ・アルノー・ド・ズヴォレ *Henri Arnault de Zwolle* (c. 1400-1466)<sup>3)</sup> によるアルノー手稿 (1440 年頃) に記されたクラヴィコードの音階配列図は、同楽器の弦とタンジェント *tangent* (打弦用の金属棒) との関係を示した最古の資料とされている。ミヒャエル・プレトリウス *Michael Praetorius* (1571/3-1621) の『楽器大全』(1618-1620) にもクラヴィコードの図像 (第 15 図版) と説明が記されている。現物は長い時間の中で破損・消失してしまうリスクがより高く、現物よりも小さく演奏する姿なども表現されている図像や文言の中にその存在が記されていることは、楽器がいつ頃からどのように存在し、往時どのように考えられ、用いられていたかを示す重要な手がかりとなる。現存する最古のクラヴィコードはライプツィヒ大学楽器博物館に所蔵されている 1543 年ドメニコ・ダ・ペーザロ *Domenico da Pesaro* 製作の楽器である。

クラヴィコードの有用性や長所・短所はダニエル・ゴットローブ・テュルク *Daniel Gottlob Türk* (1750-1813) の『クラヴィーア教本』(*Türk* 1789) などを初めとして多くの文献に示されている。カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ *Carl Philipp Emanuel Bach* (1714-1788) の『正しいクラヴィーア奏法』(*C. P. E. Bach* 1753) 序論ではクラヴィコードとフリューゲルの相違点や有用性が述べられ、弱音ながらもその響きやタッチが重要視されていたことがわかる。ヨハン・ニコラウス・フォルケル *Johann Nikolaus Forkel* (1749-1818) がヨハン・ゼバスティアン・バッハ *Johann Sebastian Bach* (1685-1750) 評伝 (*Forkel* 1802) の中で「バッハが最も愛用したのはクラヴィコードである。(中略) 彼は勉強のためにも、また個人的に音楽を楽しむためにも、クラヴィコードこそ最良の楽器だと考えていた。彼はこの楽器が自分の最も細やかな楽想を表現するのにいちばん適切だと思ったし、チェンバロやピアノでは、音量は乏しいが細かい点では著しく柔軟なこの楽器ほどには、多様な音の陰影を出すことはできないと思った。<sup>4)</sup>」と記している箇所はクラヴィコードの利点を述べるため *Closson* 1976:23-24、渡邊 2009:382、松本 2015:11、など多くの文献に引用されている。



写真 II-1-1. 東海大学所蔵のクラヴィコード (筆者撮影)



写真 II-1-2. クラヴィコードの鍵盤 (筆者撮影)

東海大学音楽学課程が所蔵するクラヴィコード<sup>5)</sup>は太田垣至氏製作のフリーデリーツィ・モデルである(写真II-1-1)。クリスティアン・ゴットフリート・フリーデリーツィ Christian Gottfried Friederici (1714-1777) (1714-1777) はドイツで活躍した鍵盤楽器製作者の一族であるフリーデリーツィ家の一人である<sup>6)</sup>。ライプツィヒ大学の楽器博物館には1765年、パリの音楽博物館には1773年製作のゴットフリート・フリーデリーツィによるクラヴィコードが所蔵されており、太田垣氏製作のこの楽器は後者のパリ音楽博物館所蔵楽器がモデルとなっている。フリーデリーツィ族の楽器は多くの音楽家に愛用されている。C. P. E. バッハはゴットフリートの兄クリスティアン・エルンスト・フリーデリーツィ Christian Ernst Friederici (1709-1780) と、ゴットフリート・ジルバーマン<sup>7)</sup>のクラヴィコードを所有していた。イギリスの作曲家、音楽史家でオルガニストでもあったチャールズ・バーニー Charles Burney (1726-1814) は1772年10月12日ハンブルクにてC. P. E. バッハによるお気に入りのジルバーマンのクラヴィコードの演奏に深く感銘を受けている(バーニー2020[1772]:411, Closson1974: 24)。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) もヨハン・アンドレアス・シュタイン Johann Andreas Stein (1728-1792) が1763年に製作した小型クラヴィコード(ブダペストのハンガリー国立博物館所蔵)、フリーデリーツィ製作のクラヴィコード(1台は第二次世界大戦中消失、1台はザルツブルクのモーツァルト博物館所蔵)などを所有し、公開演奏や作曲、旅行時の演奏などに用いた。

東海大学所蔵のクラヴィコードを手掛けた太田垣氏はフォルテピアノヤマモトコレクション、久保田チェンバロ工房にてオリジナルフォルテピアノ修復技術、鍵盤楽器製作技術を学ぶ。その後渡欧し、クリストファー・クラーク氏(仏)、アルブレヒト・ツェルニン氏(奥)、フィンチコックス博物館(英)、ブロードウッド&サンズ(英)、ヨハン・クラヴィアサロン(奥)にて修復、製作技術の研鑽を積む。現在は埼玉県自身の工房にてフォルテピアノ、チェンバロ、クラヴィコードの製作修復を行っている。浜松市楽器博物館、国立音楽大学講師および同大学楽器学資料館の楽器管理を任されている<sup>8)</sup>。

太田垣氏よりご教示いただいた基礎情報によれば、本学の楽器は2014年に発注され2015年音楽学課程に納品されている。ゴットフリート・フリーデリーツィが1773年に製作した楽器、すなわち上記パリ音楽博物館所蔵楽器の設計図をもとに製作されており、5オクターヴ61鍵盤(Ff-f3)である。ナチュラル・キーは黒檀、半音キーは牛骨、真鍮弦、ローズは羊皮紙を重ねあわせた伝統的な作りである。ケースはクラロウォールナットの突板張りで大変美しい。フリーデリーツィ・モデルは日本では大変珍しいそうである。

2022年度現在当楽器の演奏指導は演奏家の平井千絵氏<sup>9)</sup>が行っている。平井氏は桐朋学園大学ピアノ科卒で、在学中にフォルテピアノを始める。文化庁在外研修員として渡欧し、オランダ王立音楽院古楽器科修士課程首席卒業後、欧州各地で演奏活動を開始する。精力的な演奏活動とともに「らららクラシック」、「NHKBS クラシック倶楽部」などにも出演している。東海大学の他、国立音楽大学でも演奏指導にあたっている。

## II-2 チェンバロ

チェンバロ(harpsichord[英]、cembalo, clavicembalo[伊]、Cembalo, Flügel[独]、clavicin[仏]他)<sup>10)</sup>はプレクトラムで弦をはじくことで発音する撥弦の弦鳴楽器で、16-18世紀に活躍した。語源はラテン語のCYMBALUM

キュンバルムである。中東起源の箱型撥弦楽器がヨーロッパに伝わり発展した中世の重要な楽器の一つプサルテリウムに、ルネサンス期鍵盤を組み込む多様な試みの中から誕生した。チェンバロに関わる最古の記述はヘルマン・ボルという人物が「クラヴィチェンバルム clavicembalum」という楽器を発明したと主張しているという、パドヴァの法律家による 1397 年の記述とされる。最古の図像はクラヴィコードと同じく 1425 年北西ドイツのミンデンの祭壇彫刻である。前述のアルノー手稿にもチェンバロの図面が示されている。現存する最古の楽器はロンドンの王立音楽院に所蔵されている南ドイツのウルムで 1480 年頃製作された作者不詳のクラヴィツィテリウム、製作者名および製作年代が記されている最古の楽器は 1515-1516 年にフィレンツェのヴィンチェンティウス Vincentius が製作したシエナのキジアーナ音楽院所蔵のチェンバロで、メディチ家出身のローマ教皇レオ 10 世 Leo X(1475-1521)のために製作したと考えられ、その後キジ伯爵家所有となった（渡邊 2009: 90-91）。



写真 II-2-1. 東海大学所蔵のチェンバロ（筆者撮影）



写真 II-2-2. ローズの意匠（筆者撮影）



写真 II-2-3. 製作番号の手書き箇所（筆者撮影）

チェンバロは音量を変えられない為、鍵盤連結カプラーや各種レジスター、アーティキュレーションなどで表情をつける工夫がなされる。東海大学音楽学課程が所蔵するチェンバロ<sup>11)</sup>は 18 世紀フランス様式の二段鍵盤チェンバロで、1980 年に堀栄蔵（1926-2005）が製作したグジョン・モデルである。ジャン＝クロード・グジョン Jean-Claude Goujon<sup>12)</sup>は 18 世紀に活躍したフランスのチェンバロ製作者の一人である。細かなシノワズリーの施された、グジョンによる 1749 年製作の二段チェンバロがパリの音楽博物館に所蔵されている (Russel 1979)。標準的なフランス製チェンバロはケース及び蓋の表と裏が異なる色で塗装され、金箔による太いバンドでケースの側板や蓋の内側が縁取られており（渡邊 2009: 373）、堀による東海大学のグジョン・モデルの外装もこれを模していると考えられる。堀は日本を代表する鍵盤楽器製作者の一人で、東海大学は彼の手による当チェンバロと II-3 で言及するフォルテピアノを有する。

東海大学でヴィオラ・ダ・ガンバの演奏指導を行っているヴィオラ・ダ・ガンバ奏者の福澤宏氏によれば、他の製作者に比べて堀はグジョン・モデルを手掛けることが多かったそうである。響孔にはめ込まれたローズには堀のイニシャルである E と H の文字の間に東洋風のデザインが配されている (写真 II-2-2)。楽器の内側に手書き

で記されている「No. 78」とその右横に見える1980の表記は、当楽器が1980年に堀の製作した78台目の鍵盤楽器であることを示す(写真 II-2-3)。製作者名と製作年は鍵盤上(写真 II-2-5)にも表記されている。61鍵2段鍵盤(写真 II-2-4)のフランス様式でそれぞれ音域は5オクターヴ(F<sub>F</sub>-f<sub>3</sub>)である。ナチュラル・キーに黒檀、半音キーに象牙、弦は鉄弦(低音部は真鍮弦)、プレクトラムには本来鳥の羽軸等が用いられるが、このチェンバロではデルリンが用いられている。バロック・ピッチA=415とモダン・ピッチA=440の切り替えが可能である。上段と下段鍵盤を連結するカプラーを備えており、下鍵盤4'と8'、上鍵盤、鹿革バフ・ストップ付きの上鍵盤、カプラーで連結させた上鍵盤と下鍵盤、等の音色を出すことができる。



写真 II-2-4. チェンバロの二段鍵盤部分 (筆者撮影)

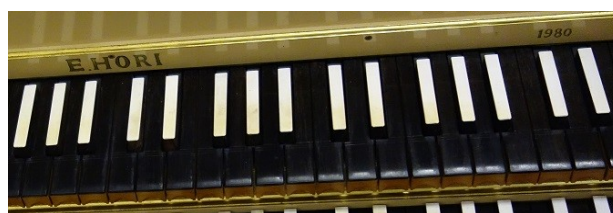


写真 II-2-5. 製作者名、製作年 (筆者撮影)

2022年度現在当楽器の演奏指導は演奏家の上藪美佳氏<sup>13)</sup>が行っている。上藪氏は洗足学園大学音楽学部ピアノ科を優秀賞を得て卒業、大学専攻科音楽学修了後渡仏し、ストラスブール国立音楽院チェンバロ科を首席で卒業。古楽ディプロマを取得する。帰国後、ソロ、通奏低音奏者として演奏活動、後進の指導に当たる。洗足学園音楽大学でも演奏指導にあたっている。

### II-3 フォルテピアノ

フォルテピアノ (fortepiano[伊]、Hammerklavier、Hammerflügel[独]他)<sup>14)</sup>は18世紀から19世紀に用いられていた、ハンマーで弦を打つことで発音する打弦の弦鳴楽器である。イタリア、パドヴァ出身の鍵盤楽器製作者バルトロメオ・クリストーフォリ Bartolomeo Cristofori(1655-1732)<sup>15)</sup>により発明された。1687年にトスカカーナ公フェルディナンド・デ・メディチ Ferdinando de Medici(1663-1713)がヴェネツィアへの途上パドヴァに立ち寄った際クリストーフォリの楽器を気に入り、フィレンツェの宮廷へと誘ったという。クリストーフォリは1688年5月よりメディチ家の楽器管理兼楽器製作者として仕え、1700年までにフォルテピアノを考案・製作した。1700年のメディチ家の楽器目録内には、現存する世界最古のフォルテピアノはこのクリストーフォリによる1720年製の楽器で、ニューヨークのメトロポリタン美術館に所蔵されている。彼のフォルテピアノはあと2台現存しており、1722年製のものはローマの楽器博物館、1726年製はライプツィヒ大学楽器博物館が所蔵している(渡邊2009: 273)。

クリストーフォリの発明は『イタリア文学』誌上に掲載されたシピオーネ・マッフエイ Sipione Maffeiの1711年の論文で「Gravecembalo col piano e forte (ピアノとフォルテの音を伴う大チェンバロ)」として紹介され、その後ドイツ語にも翻訳されるなど注目を集めた。ドイツでのピアノ製作に重要な貢献を果たしたのはII-1でも言及したゴットフリート・シルバーマン Gottfried Silbermann(1683-1753)<sup>16)</sup>である。シルバーマン家はドイツの楽器鍵盤製作家一族で、ゴットフリートは兄のアンドレアス Andreas Silbermann(1678-1734)とともに、オルガン製作者として極めて重要な人物でもある。G.シルバーマンはオルガンの他にパンタレオンやチェンバロ・ダムール、クラヴィコードなどの弦楽器も作成しており、彼が作成した最初のフォルテピアノのうち1台は1732年ザクセン選帝侯に献上されている。J.S.バッハはG.シルバーマンのピアノ改良への助言や販売協力もしており、1747年5月7日にはポツダム宮殿にて息子のC.P.E.バッハが仕えているプロイセン王フリードリヒ大王

Friedrich II (1712-1786)の御前でG. ジルバーマンのピアノを演奏し喝采を博している。



写真 II-3-1. 東海大学所蔵のフォルテピアノ (筆者撮影)



写真 II-3-2. 鍵盤部分 (筆者撮影)



写真 II-3-3. ネームプレート。(筆者撮影)

東海大学音楽学課程が所蔵するフォルテピアノ<sup>17)</sup>は1993年堀栄蔵製作の1795年ヴァルター・モデルである(写真 II-3-1)。鍵盤数は63鍵、音域は約5オクターヴ(FF-g3)、ピッチはA=430、膝レバーが2種(右がダンパー、左がモデラート)備えられている。ナチュラル・キーは黒檀、半音キーは象牙、弦は鉄弦(低音部は真鍮弦)である。ガブリエル・アントン・ヴァルターGabriel Anton Walter (1752-1826)<sup>18)</sup>は18世紀から19世紀初頭にかけてウィーンで活躍した傑出した鍵盤楽器製作者の一人である。ヴァルターはドイツ出身で、ウィーンに移住後工房を開いたのは1780年頃とされる。当初はエステルハージ侯の宮廷にある鍵盤楽器管理やオルガン製作に従事していた。1790年12月には「帝室オルガン製作者兼楽器製作者」という称号を得ている。ヴァルターの楽器と関連のある高名な作曲家としてはモーツァルトとルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven(1770-1827)がまず挙げられよう。両者ともフォルテピアノよりも先にクラヴィコードやチェンバロ、オルガンに親しんでおり、モーツァルトは1781年暮-1782年頃にヴァルターのフォルテピアノを入手している。このピアノは後年手が増えられ、現在はザルツブルクのモーツァルト博物館所蔵になっている。父レオポルトに宛てた1777年10月17日付の手紙でモーツァルトは、それまでフランツ・ヤーコブ・シュペート Franz Jacob Späth(1714-1781)のピアノを気に入っていたが J.A. シュタインのピアノをより優れていると認めたことが記されている。1781年ウィーンに定住した当初はトゥーン伯爵夫人のシュタイン製ピアノを使用していたので、ウィーン移住後間もなくヴァルターのフォルテピアノを入手したことになる。ベートーヴェンはフォルテピアノの機能が次々と更新された時代に生きており、彼のピアノ作品は作曲当時彼が用いた鍵盤楽器の変遷を反映している。ヴァルターのフォルテピアノは1800年頃の彼の家にあったことを弟子のカール・チェルニーが言及しているが、残念ながら1802年末頃よりベートーヴェンとヴァルターに不和が生じてしまう。ベートーヴェンが用いた楽器は数多く、ヴァルトシュタイン伯爵から1788年に贈られたシュタイン製、シュトライヒャーStreicher 夫妻か

ら 1796 年演奏会用に送られたシュトライヒャー製、エラール Erard 製(1803)、ブロードウッド Broadwood 製(1818)、などが挙げられる。1825 年にコンラート・グラーフ Conrad Graf (1782-1851) から提供されたフォルテピアノはボンのベートーヴェン・ハウスに所蔵されている (渡邊 2009: 675-725)。

2022 年度現在当楽器の演奏指導は II-2 で言及したクラヴィコードとともに平井千絵氏が行っている。□□□

#### II-4 パイプ・オルガン

オルガン (organ[英]、Orgel[独]、orgue、orgues[仏]、organo[伊]他)<sup>19)</sup> のうちパイプ・オルガンは鍵盤に関連づけられる各パイプに空気が送られることで発音する気鳴楽器である。その起源はエジプト、アレキサンドリアの技師クテシビオス Ctesibius が考案したヒュドラウリス Hydraulis (水オルガン) とされる。ハンガリーのアキンクム Aquincum などの遺物(228 年頃)、ドイツのネニヒ Nennig(230-240 年頃)やリビアのズリテン Zliten(紀元前 1 世紀頃)にあるモザイク画、トルコのイスタンブルにあるテオドシウス Theodosius I 世(347-395)のオベリスク台座部分レリーフ (390-395 年頃) 等の図像より古代ローマ帝国・ビザンチン帝国の様々な地域でパイプ・オルガンが用いられていたことが理解できる (松前 1976、フライシュハウアー1985[1977]:126、Bicknell et al. 2001: 582)。これらの時期オルガンは祝宴や闘技場で用いられ、教会に設置されるようになるのは 9-10 世紀頃からである。



II-4-1. 東海大学所蔵の辻オルガン (筆者撮影)



II-4-2. 二段鍵盤部分 (筆者撮影)



II-4-3. ペダル鍵盤部分 (筆者撮影)

東海大学音楽学課程が所蔵するパイプ・オルガン (以下東海大学辻オルガン、写真 II-4-1)<sup>20)</sup> は日本を代表するオルガン製作者辻宏 (1933-2005) によるもので北ドイツ・バロック様式である。辻は 1958 年東京藝術大学器楽科 (オルガン専攻) を卒業後、アメリカのシュリッカー社やオランダのフレントロップ社で経験を積んだ後、1964 年神奈川県座間市に「辻オルガン建造所」を設立、1976 年に岐阜県鴨川郡白川町に移転し「辻オルガン」と改称する。80 台以上のオルガンを製作し、スペインでのサラマンカ大聖堂オルガンなどの修復も手掛けた。「イザベル女王勲章エンコミエンダ章」、「黄綬褒章」、「現代の名工」などで受賞・表彰されている。1973 年に「日本オルガン研究会」を松原茂氏とともに設立し運営、イタリア・オルガン音楽アカデミー、スペイン・オルガン音楽アカデミーを運営するなど、製作者としてのみでなくオルガン研究・演奏教育の場の提供・発信も行っている。オルガン製作者の育成にもあたっており、辻が日本におけるオルガンの世界に果たした貢献は多岐にわたると言

えよう。

北ドイツの歴史的オルガンの視察および音楽学者ハラルド・フォーゲル Harald Vogel (1941-) 氏との出会いで強い刺激を受けたことにより作風が変わり、辻による最初の北ドイツ様式のオルガン（廣野 2005: 54）が 1974 年香川県屋島教会に完成する。東海大学辻オルガンは 1975 年 6 月 2 日に完成した辻の 15 台目のオルガンで、前述の屋島教会のオルガンは 13 台目、完成は 1974 年 3 月 20 日とされているので（日本オルガニスト協会 2005: 57）、東海大学辻オルガンも北ドイツ様式による辻の初期のオルガンの一つと言えよう。A=440、写真 II-4-2、II-4-3 のように二段鍵盤（上下ともに 56 鍵ずつ）とペダル鍵盤（30 鍵）、ペダルと手鍵盤の連結カプラー、上下鍵盤連結カプラーを有する。北ドイツのオルガンビルダーの中でも辻が強く影響を受けたのはアルプ・シュニットガー Arp Schnitger (1648-1719) とされている（金澤 2005: 53、辻紀子 2007: 197）。辻自身幾度もシュニットガーのオルガンに言及しており（辻 2007）、オーウェンも東海大学辻オルガンがオランダ、フローニンゲンのニュースヘームダ Nieuw-Scheemda にある改革派教会にあるシュニットガーオルガンの「双子」と述べている（オーウェン 1976: 67）。シュニットガーはドイツのオルガン製作者の一族で、アルプは 17 世紀後半北ドイツで活躍、新たなオルガンの建造の他、修復等も数多く手がけた（EDWARDS 2001、EHLERS 2015、秋元 2002: 48）。輝かしいミクスチャー管の音色が特徴の一つで（EDWARDS 2001: 564）、東海大学辻オルガンにもその傾向は見られる。

ストップは 7 つ、うち 3 つが分割ストップで、内訳は上鍵盤に Gedackt 8'、Principal 4'、Mixture II (b と t

表 II-4-1. 各ストップの配置と作用鍵盤範囲

左側のストップ		右側のストップ	
ストップ名	機能範囲	ストップ名	機能範囲
Quintadena 8'(b)	下左側24鍵	Gedackt 8'	上全56鍵
Rohrflöte 4'	下全56鍵	Quintadena 8'(t)	下右側32鍵
Oktave 2'(b)	下左側24鍵	Principal 4'	上全56鍵
Mixtur II(b)	下左側24鍵	Oktave 2'(t)	下右側32鍵
Subbaß 16'	ペダル全30鍵	Mixtur II(t)	下右側32鍵



写真 II-4-4. 東海大学辻オルガン左ストップ（筆者撮影） □ 写真 II-4-5. 東海大学辻オルガン右ストップ（筆者撮影）

の分割ストップ)、下鍵盤に Quintadena 8' (b と t の分割ストップ)、Rohrflöte 4'、Oktave 2' (b と t の分割ストップ)、ペダル鍵盤に Subbaß 16' である（写真 II-4-4）。表 II-4-1 に、各ストップの配置と作用鍵盤範囲をまとめた。ストップ数が少ないため音色や音量の変化をつけるために様々な工夫が必要であるが限界がある。そのため同オルガンが設置されているスタジオ・ソナーレには異なるストップやスウェル・ペダルを備えた電子オルガン（ホフリヒターオルガン C216）も備わっている。

オーウェンは東海大学辻オルガンに関わる重要な二人の人物として当時芸術学科長でありオルガン製作を依頼した松前紀男氏とオルガン完成後その実技指導にあたった月岡正暁氏を挙げており（オーウェン 1976: 69）、設置当初の重要な来歴の片鱗が偲ばれる。2022 年度現在当楽器の演奏指導は演奏家の川越聡子氏<sup>21)</sup>が行っている。■川越氏は東京藝術大学音楽学部オルガン科卒業、同大学院音楽研究科を修了後渡欧し、トゥールーズ国立高等



芸術院を修了する。第2回アンドレア・アンティエコ・ダ・モンターナ国際オルガンコンクールで第2位入賞する。洗足学園音楽大学でも演奏指導にあたっている。東京藝術劇場の副オルガニストでもある。

### III. 活用事例

#### III-1 学内外貢献

筆者は東海大学が持つ上記の貴重な古楽文化資源を活用して学内外に還元すべく、鍵盤古楽器演奏家を講師陣に、数年前から写真 III-1-1 のような**古楽器体験・学生演奏の場を企画・実施**してきている。これは東海大学湘南キャンパス全体で地域に開かれた大学としての試みで開催されている「グローバルフェスタ」という催事の中の1企画である。講師陣はいずれも東海大学で演奏指導をしておられる方々で、チェンバロは上菌美佳氏、フォルテピアノとクラヴィコードは平井千絵氏、パイプ・オルガンは川越聡子氏が担当し、曲目を添えて事前申込を



写真 III-1. 2019 年度古楽器体験企画掲示物

した受講者数名を対象に体験レッスンを行っている。それぞれの楽器に老若男女様々な体験希望者が経験・未経験を問わず集まり、企画の継続や、より多い頻度での体験の場を求める声が多数あった。体験者が未成年の場合、保護者のみならずピアノ指導者も来場し、講師陣への質問なども行われていた。特に小学生以下の受講者は本人および保護者の反応から、機会さえあれば積極的に古楽器に触れたいという需要が強くなる事が確認されている。各種古楽器の演奏経験がある方々は、質の高い講師陣と、大学所蔵の稀少楽器に触れる体験の価値を理解し、受講曲目もしっかり準備して臨んでくださっている。関西など遠方から参加してくださる方もいらした。体験レッスン後に行われる在学生の演奏の場ではピアノ独奏、連弾、二台ピアノ、声楽、管・弦楽器独奏、ボサノヴァ、ディキシーランド・ジャズ、バロック・ダンス、コンピューター・ミュージック（有名楽曲のアレンジ、例えば2019年はDJ コントローラーを用いた現代風アレンジのバッハ作品メドレー：トッカータとフーガのダンスミュージック風、ペツォルトのメヌエットのアニソン風、G 線上のアリアのロック風アレンジ）など古楽器以外の演目に加えヴィオラ・ダ・ガンバも含めた古楽器独奏、チェンバロやフォルテピアノとヴァイオリンやトランペット（例えば2017年はチェンバロ伴奏によるトランペット・ヴォランタリー、2018年はJ.S.バッハ作曲ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ第1番 BWV1014、モーツァルト作曲クラヴィーアとヴァイオリンのためのソナタ KV304-当日はフォルテピアノと演奏-）、声楽や管楽器アンサンブルとパイプ・オルガンなど古楽器との共演も織り交ぜ、学生たちも演奏およびプログラム・ノート作りに積極的に取り組んだ。残念ながらコロナ禍により学外者はもちろん学生すらも入校できない時期があり、こうした体験や学生演奏の場は一時中断せざるを得なくなったが、制限はあるものの昨秋にやっと再開された。

上記のような大学全体催事の一環としてではなく、筆者の担当授業をベースとして福澤、平井、上菌、川越各講師陣には古楽器の基礎を学び触れる機会を多々ご協力いただいている。鍵盤古楽器について学ぶ場合は、事前の授業にて該当楽器が用いられていた時代の鍵盤楽器作品および作曲者について予習をさせるとともに、ピアノである程度弾けるよう指導することで、古楽器との相違点・共通点をより認識しやすくするよう工夫している。楽器演奏体験と趣旨は異なるが、楽器の歴史や構造を製作者自身から学ぶという貴重な経験も教育内に織り交せている。2018年7月12日には筆者企画・運営の『クラヴィコードの歴史と構造』という特別講座に II-1 で言及した東海大学所蔵クラヴィコード製作者の太田垣氏をゲスト講師に迎えてレクチャーをしていただいた。造形物を作り出す、発音の為の様々な工夫を学ぶという点で、音楽に関心を持つ学生に限らず物理や造型分野の学生にも有益であろう。

昨秋(2022年秋)は学園祭で大学院生を中心に各種楽器履修学生が来場者に簡単な演奏法や楽器解説を示す企画

「古楽器弾く会？」を新たに設けた。従来は講師をプロの演奏家に依頼していたが、学園祭では学生の実技履修・楽器知識の成果が発揮された。演奏体験ではないがパイプ・オルガン設計を行ったことがあるという理系の学生がメカニクな関心から現物見学と楽器解説を興味津々で聞きに来てオルガン履修学生に多くの質問をしたり、バロック研究会の学生や他学部学生でピアノは弾けるがこうした古楽器に触れる機会のない学生たちが多々体験に来てくれていた。民間の各種音楽関連サークルにて活動を行っている社会人も楽器に強い関心を示していた。

以上述べてきたように、総合大学ならではの多様な学生たちへの演奏体験・楽器見学の機会提供など、これら古楽器資源をさらに活用することで、東海大学の芸術文化発信力をさらに高めることができるとは考える。

### III-2 教育・研究活用

これらの鍵盤古楽器とその演奏作品は研究対象としての役割も果たし、これまでに卒業論文や修士論文が当課程でも提出されてきている。演奏上の工夫は日々の練習の積み重ねで体得される部分が多いため、演奏者は普段記録や言語化・文字化を意識的に行わないことが多い。研究・教育上はある程度の可視化・言語化・文字化が必要になる。本節では同じ鍵盤楽器でもピアノと異なり、カブラーやストップ操作においてピアノ演奏以外の奏法に関わる知識習得が必要になるパイプ・オルガンにおける演奏上の工夫の一部を記録する試みを行った。筆者は身体動作の記録研究を行うこともあるため、表演の一部を何等かの記号や数値等で記録し検討・分析することの教育・研究上の意義を感じている。パイプ・オルガンの発音は鍵盤操作のみでは不可能で、ストップ操作も重要である。オルガンのストップは音色や音量、音域選択に直結し、ストップ数が多ければ多いほどその組み合わせは多岐にわたる。このストップ操作も含めた音響・鍵盤等の選択に関わる作業をレジストレーションと呼ぶが、本稿ではその中の「ストップ選択」に着目する。公共の場に設置されているオルガンは通常ストップ・リストが公開されており、演奏家は事前にそのリストを参照してレジストレーションを想定し、事前リハーサルにてレジストレーションを決めてから演奏会当日に臨む。演奏上の音響要素の決定において極めて重要な作業であるが、演奏会で用いるレジストレーションが当日のパンプレットなどで公開されることは慣例的ではない。作曲家、演奏家、研究者等によるレジストレーションの記録は残されているものもあり研究上および演奏慣習を知る上で大変重要であるが、その知識のみで個別のオルガン演奏に適したレジストレーションを万全に考えることはできない。オルガン個体により音色やパイプ数が変わるため同じ曲でも演奏するオルガンごとに、同じオルガンで同じ曲を演奏しても演奏者ごと、同じ演奏者でも体調などでレジストレーションは異なる。体得には多くの経験が必須である。

故にオルガン初心者および経験の浅い者がこれを行うことは困難で、実技指導者が代行しセッティングしたレジストレーションで演奏を行うことが多い。演奏のために選択されたストップは譜面上にメモして備忘もしくはアシスタントにストップ操作をしてもらうための目印とすることが多いようである。譜面上に散らばるレジストレーションの記入箇所を表などに集約させることで全体を可視化し易くし、分析や比較研究の一助とするために、本稿ではレジストレーションの一部の譜面外表記を試みる。これはすでに学生への教育にも導入しており、異なる演奏者、異なるオルガン間のレジストレーション比較などに用いている。ここでは有名かつ短い事例として J. S. バッハ作曲トッカータとフーガ ニ短調 Toccata und Fuge (BWV565) のトッカータ冒頭 3 小節に関し、川越氏からご教示いただいたレジストレーション例を用いる。このトッカータはバッハのオルガン作品の中でも特に有名なもののひとつで、クラシック音楽に造詣が深くなくともどこかで耳にしたことのある旋律であろう。表 III-2-1 は、このトッカータ冒頭を東海大学辻オルガンで演奏する際の選択ストップ例<sup>22)</sup> (川越氏より 2022 年 1 月にご教示) を表にしている。カブラーは全て入れた状態にしている。

表 III-2-1. 東海大辻オルガンにおける J.S. バッハのトッカータ冒頭使用ストップ表示例

左側のストップ	右側のストップ
Oktave 2'(b)	Gedackt8'
Mixtur II(b)	Principal 4'
Subbaß 16'	Oktave 8'(t)
	Mixtur II(t)

表 III-2-2. 東海大辻オルガンにおける J.S. バッハのトッカータ冒頭使用ストップ表示例 2

左側のストップ		右側のストップ	
ストップ名	使用の有無	ストップ名	使用の有無
Quintadena 8'(b)	×	Gedackt8'	○
Rohrflöte 4'	×	Quintadena 8'(t)	×
Oktave 2'(b)	○	Principal 4'	○
Mixtur II(b)	○	Oktave 2'(t)	○
Subbaß 16'	○	Mixtur II(t)	○

この表では東海大学辻オルガンのストップのうち、トッカータ冒頭で用いるストップを左右に分けて、上から表記している。表 II-4-1 および写真 II-4-4, 5 に示したように同オルガンのストップは左右に 5 本ずつあるので簡便に示す為各ストップを○×で表 III-2-2 のように記すこともできる。使われていないストップがすぐわかるのも表 III-2-2 であるが、表 III-2-1 のほうが必要情報簡略度は高い。

表 III-2-3. 東海大学辻オルガンにおける J.S. バッハのトッカータ冒頭レジストレーション例

小節	上鍵盤ストップ	下鍵盤ストップ	ペダル鍵盤
1	Gedackt8', Principal 4'	Oktave 2'(b,t), Mixtur II(b,t)	Subbaß 16'
2-3 (ペダル部分より)	Gedackt8', Principal 4'	Oktave 2'(b,t)	Subbaß 16'

これらのストップがどの鍵盤と対応するかは表 II-4-1 に示しているが、その情報も含めて選択ストップ変遷を示すものが表 III-2-3 である。東海大学辻オルガンで同一箇所を演奏する際の他のレジストレーションや、他のオルガン・他の奏者のレジストレーションとの比較検討も可能である。他にも表示方法は多々あり、演奏を学んでいる学生にレジストレーション選択の根拠や効果をより意識的に理解させるためにこうした表作成を伴う分析指導も行っている。これらの表示内容は当然ながら演奏指導者の下、オルガンを扱うための様々なマナーとともに徐々に体得されるべきものであることは言うまでもない。なお、これらのストップの選択基準は別稿にて触れることとする。

#### IV. おわりに

音楽大学ではなく総合大学である東海大学において、これらの楽器に触れあうことのできる環境を作るメリットの一部としては以下が挙げられる。

- ① 制度上芸術系科目を履修できない他学部生にも体験の場が与えられる→古楽実践の裾野の拡大
- ② 学外者にも体験の場が与えられる→古楽実践の裾野の拡大
- ③ クラシック以外の音楽を志向する学生にも体験の場が与えられる→ジャンルを超えた音楽の生成可能性と異なる音楽ジャンルの共存・融合
- ④ 異なる研究領域の学生がこれらの楽器に親しむことによる新たな研究・教育誕生の可能性

本稿における東海大学鍵盤古楽器類の活用は古楽演奏専門家の育成を目指してはいない。音楽・古楽を必ずしも専門としない人々への古楽に触れる充実した良質な機会の提供が、ひいては古楽も含めた音楽活動全体、芸術活動全体を活性化させる需要・供給の裾野の拡大につながることを見据えている。

東海大学湘南キャンパスを例に挙げるならば、文学部、理学部、法学部、体育学部等様々な学部があり、これらの学部には芸術学科には入らずとも幼少時よりピアノやエレクトーンを学び、芸術学科学生以上の演奏能力を有する学生も数多く存在する。これまでは音楽学課程以外の学生が、古楽器に触れることは制度上不可能であっ

たため、「せっかく学内に貴重な楽器があるのに触れることができず残念」などの声が数多くあったが、体験の場や何等かのプロジェクト等により学外のみならず他学科学生にも開かれた音楽体験の場を提供することで、音楽経験者にも未経験者にも古楽をより身近に感じてもらえる一助になればと考える。

また、音楽大学とは異なる関心を持つ多様な人々が集う総合大学だからこそ、音楽が生活の中心ではない人々にも音楽を体験する喜びを届けることが可能であり、誰もが一度は耳にしたことのあるバロック、古典派の名曲を、モダン・ピアノでは味わえない響きを持つ作曲当時の楽器で演奏・鑑賞する喜びをシェアすることができるはずである。

さらに 2022 年度発足の新芸術学科ではポピュラー音楽やコンピューターでの作曲を志向する学生も多い。彼らにとって古楽演奏を一度でも体験し、その響きを体感することは、自らの芸術創造の可能性を広げるかけがえない経験となる。電子機器類で再現された音のみの理解と、生の楽音を体感し何等かの創作・表現に活かすこととは、学生の経験値の質に雲泥の差がある。

こうした個々人の体験の積み重ね、体験の場、聞く耳・演奏する耳（プロの演奏家ではなく一般人として）の拡充が、古楽をより身近に感じてもらい、多様な音楽文化を身近にすることで精神的により豊かな生活を現代社会で送るための教育的・社会的枠組みづくりに寄与すると考える。また、そうした場面において演奏導入をし易くするための教育・紹介ツールの模索・研究も重要である。東海大学芸術学科音楽学課程所蔵の鍵盤古楽器類は極めて重要な役割を果たし続ける可能性に満ちていると言えよう。

## 注

- 1) パイプ・オルガンの演奏作品は他の 3 種よりも時代に限定されないが、一般的にバッハなどバロック時代の作曲家による作品が著名であり学習においても欠かせないこと、当課程では古楽器にカテゴライズしていることから、本論では鍵盤古楽器に含める。スピネットも所蔵するが、現況活用が他と異なるため別の機会に言及する。また本学ではヴィオラ・ダ・ガンバも古楽器実技教育に取り入れ福澤宏氏が実技指導をしているが、これも別の機会に言及する。これらの楽器は同課程が所在する東海大学湘南キャンパス内 10 号館 3 階に設置されている（パイプ・オルガンはスタジオ・ソナーレと呼ばれる音響実験スタジオ、他は第二レッスン室）。
- 2) クラヴィコードの一般的概要は RIPIN; BARNES et al. 2001, 白砂 2010、大久保 1982 等を参照。
- 3) ズヴォレ出身の医学博士、占星術師、天文学者。ブルゴーニュのフィリップ善良公、シャルル 7 世、ルイ 11 世に仕える。アルノー手稿 (*F-Pn* lat. 7295) には撥弦機構と思われるアイデアや打弦機構らしきアイデアも示されている (KOSTER 2001、久保田 2009: 12)。
- 4) フォルケル 1983: 318。
- 5) 東海大学芸術学科音楽学課程所蔵のクラヴィコードに関する情報は製作者の太田垣至氏よりご教示いただいた。ここに謝意を表す。
- 6) フリーデリーツィについては BOALCH 1974: 46-47, KLOTZ; FRIEDRIH 2001、渡邊 2009 等を参照。
- 7) ゴットフリート・ジルバーマンについては II-3 で述べる。
- 8) 2018 年実施の太田垣氏による特別レクチャー告知掲示物用にお寄せいただいたプロフィールより。
- 9) 個人サイトは <https://chiehirai.com/> (最終閲覧 2022 年 8 月 1 日)。
- 10) チェンバロの一般的概要は RUSSEL 1979, 渡邊 2009、RIPIN; SCHOTT et al. 2001, 白砂 2010、大久保 1982、久保田 2009 等を参照。
- 11) 東海大学芸術学科音楽学課程所蔵のチェンバロに関する情報は、福澤宏氏および同楽器演奏指導講師の上菌美佳氏よりご教示いただいた。ここに謝意を表す。福澤氏はオランダのデン・ハーグ王立音楽院をソリスト・ディプロマを得て卒業。ヴィオラ・ダ・ガンバをヴィーラント・クイケン、室内楽をシグスヴァルト・クイケン、バルトルド・クイケンの各氏に師事する。在学中より数々の室内楽のメンバーとしてオランダ、ドイツを中心にヨーロッパ各地で演奏活動を行った。帰国後はソロ・リサイタル他、古楽関係の音楽祭やサイトウ・キネン・フェスティバル、NHK・FMリサイタル、名曲リサイタルなどに出演している。またバッハ・コレギウム・ジャパンによる演奏会、レコーディングに数多く参加するなど、全国各地で多彩な活動を行っている。フォンテックより CD 「マラン・マレ/ヴィオール曲集第 3 巻」(2015 年レコード芸術誌特選盤) をリリース。「題名のない音楽会」他多くのテレビ番組にも出演している。東京藝術大学でも演奏指導を行っている。個人サイトは <http://hiroshifukuzawa.web.fc2.com/index.html> (最終閲覧 2022 年 8 月 1 日)。
- 12) グジョンに関しては BOALCH 1974: 54, RUSSEL 1979, 渡邊 2009 などを参照の他、前述の福澤宏氏よりご教示いただいた。ここに謝意を表す。

- 1 3) 個人サイトは <http://mikau.jp> (最終閲覧 2022 年 8 月 1 日)。
- 1 4) フォルテピアノの一般的概要は RIPIN; POLLENS et al. 2001、渡邊 2009、伊東 2007、久保田 2009、筒井 2020 等を参照。
- 1 5) クリストーフオリについては RIPIN; POLLENS, et al. 2001、渡邊 2009、山本 2007 等を参照。
- 1 6) ゴットフリート・ジルバーマンについては RIPIN; POLLENS, et al. 2001、渡邊 2009 等を参照。
- 1 7) 東海大学芸術学科音楽学課程所蔵のフォルテピアノに関する情報は、前述の福澤宏氏および同楽器演奏指導講師の平井千絵氏よりご教示いただいた。ここに謝意を表す。
- 1 8) ヴァルターについては LATCHAM2001、渡邊 2009:594-609、筒井 2020 等を参照。
- 1 9) パイプ・オルガンの一般的概要は BICKNELL et al. 2001、椎名 2019、日本オルガニスト協会 2019、秋元 2002、2010、吉田 1981、ナイランド 1988 等を参照。
- 2 0) 東海大学芸術学科音楽学課程所蔵のパイプ・オルガンおよび辻氏に関しては辻 2007、辻紀子 2007、金澤 2005、2007、廣野 2005、日本オルガン研究会 2005、石井 2021 の他、同楽器演奏指導講師の川越聡子氏よりご教示いただいた。ここに謝意を表す。
- 2 1) 個人サイトは <https://satoko-kawagoe.com> (最終閲覧 2022 年 8 月 1 日)
- 2 2) 川越氏より 2022 年 1 月にご教示いただいた。ここに謝意を表す。

## 参考文献

秋元道雄

- 2002 『パイプオルガン：歴史とメカニズム』、東京：ショパン。  
2010[1966] 「オルガン」、堀内久美雄（編集兼発行）『新訂 標準音楽辞典 アーチ』、東京：音楽之友社、pp. 307-310。

BACH, Carl Philipp Emanuel

1753 *Versuch über die wahre Art das Klavier zu Spielen*, Berlin[バッハ、カール・フィリップ・エマヌエル、2000、東川清一（訳）『カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ 正しいクラヴィア奏法』、東京：全音楽譜出版社]。

バーニー、チャールズ

- 2020 小宮正安（訳）『チャールズ・バーニー音楽見聞録 ドイツ篇』、東京：春秋社。

BICKNELL, Stephen; OWEN, Barbara; WILLIAMS, Peter

- 2001 “Organ”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 18, New York: Oxford University Press, pp.565-651.

BOALCH, Donald H.

- 1974[1956] *Makers of the Harpsichord and Clavichord 1440-1840*, London: Oxford University Press.

BUSH, Douglas; KASSEL, Richard(eds.)

- 2015[2006] *The Organ: An Encyclopedia*, New York: Routledge.

CLOSSON, Ernest

- 1976[1944] Ames, Delano(trans.), Golding, Robin(ed.) *History of the Piano*, London: Elek Books Ltd.

COLE, Michael

- 1998 *The Pianoforte in the Classical Era*, Oxford University Press.

EDWARDS, Lynn

- 2001 “Schnitger, Arp”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 22, New York: Oxford University Press, p.563-564.

EHLERS, Jurgen

- 2015 “Schnitger, Arp”, BUSH, Douglas; KASSEL, Richard(eds.), *The Organ: An Encyclopedia*, New York: Routledge, pp. 496-497.

EHRlich, Cyril

- 1990 *The Piano: A History*, Oxford University Press.

FORKEL, J. Nikolaus

1802 *Über Johann Sebastian Bachs Leben, Kunst und Kunstwerke*, Leipzig[フォルケル、J.N. 1983 角倉一朗（訳）「バッハの生涯および芸術作品について」、『バッハ資料集（バッハ叢書 10）』白水社。

HENKEL, Hubert

1981 *Clavichorde*, Leipzig: VEB Deutscher Verlag für Musik Leipzig.

廣野嗣雄

2005 「辻宏さんを偲んで」、『オルガン研究 33 号』日本オルガン研究会、pp. 54-55.

フライシュハウアー、ギュンター

1985[1977] 『人間と音楽の歴史：エトルリアとローマ』、東京：音楽之友社。

HUBBARD, Frank

1978 *Three Centuries of Harpsichord Making*, Harvard University Press.

石井大雅

2021 『オルガンの構造：東海大学辻オルガンを中心としたオルガンの比較』、2020 年度東海大学芸術学科音楽学課程卒業論文、41p。

伊東信弘（編）

2007 『ピアノはいつピアノになったか』、大阪：大阪大学出版会。

金澤正剛

2005 「辻宏氏を偲んで」、『オルガン研究 33 号』日本オルガン研究会、pp. 53.

2007 「辻宏の生涯と業績」、辻宏（著）『オルガンは歌う：歴史的建造法を求めて』、東京：日本キリスト教団出版局、pp. 181-195。

KLOTZ, Hans; FRIEDRICH, Felix

2001 “Friderici”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 11, New York: Oxford University Press, p.265.

小岩信治；平野昭

2007 「ショパンのアンサンブルを、19 世紀サロンの響きで：＜音楽のまち＞浜松からの文化発信をめざして」、『静岡文化芸術大学研究紀要 7 号』、pp. 135-147。

KOSTER, John

2001 “Arnaut de Zwolle, Henri”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 2, New York: Oxford University Press, pp.34.

久保田彰

2009 『チェンバロ：歴史と様式の系譜』東京：ショパン。

LATCHAM, Michael

2001 “Walter, (Gabriel) Anton”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 27, New York: Oxford University Press, pp.51-52.

松居直美

2022 「パイプオルガン普及のためのひとつの試み」、『音楽文化研究 21 号』、pp.133-145。

松前紀男

1976 「アクィンクム (Aquincum) のオルガン」、『オルガン研究 第 3 号』、日本オルガン研究会、pp.64-66.

松本彰

2007 「第 1 講：ピアノの誕生」、伊東信弘（編）『ピアノはいつピアノになったか』、大阪：大阪大学出版会、pp. 1-28。

MAUNDER, Richard

1998 *Keyboard Instruments in Eighteenth-Century Vienna*, Oxford University Press.

ナイランド、オースティン

1988 丹羽正明；小穴晶子（訳）『パイプオルガンを知る本』、東京：音楽之友社。

日本オルガニスト協会（監）松居直美；廣野嗣雄；馬淵久夫（編）

2019 『パイプオルガンの芸術：歴史・楽器・奏法』東京：道と書院。

日本オルガン研究会（編）

- 2005 「辻宏氏略歴・作品目録」、『オルガン研究 33 号』日本オルガン研究会、pp. 55-58。  
日本チェンバロ協会（編）  
2022 『チェンバロ大事典』、東京：春秋社。
- 大久保靖子  
1982 「クラヴィコード」、下中邦彦（編）『平凡社 音楽大事典 第2巻』東京：平凡社、pp. 782-784。
- オーウェン、バーバラ  
1976 「東海大学のオルガン」、『オルガン研究 第4号』、日本オルガン研究会、pp.67-69。
- RIPIN, Edwin M.; BARNES, John; HUBER, Alfons; PASCUAL, Beryl Kenyon de; KERNFELD, Barry  
2001 “Clavichord”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 6, New York: Oxford University Press, pp.4-18.
- RIPIN, Edwin M.; SCHOTT, Howard; KOSTER, John, WRAIGHT, Denzil; DE PASCUAL, Beryl Kenyon; O'BRIEN, G. Grant; HUBER, Alfons; DOWD, William; MOULD, Charles; WHITEHEAD, Lance; ELSTE, Martin  
2001 “Harpichord”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 11, New York: Oxford University Press, pp.4-44.
- RIPIN, Edwin M.; POLLENS, Stewart; BELT, Philip R.; MEISEL, Maribel; HUBER, Alfons; COLE, Michael; HECHER, Gert; DE PASCUAL, Beryl Kenyon; HOOVER, Cynthia Adams; EHRLICH, Cyril; WINTER, Robert; ROBINSON, Bradford  
2001 “Pianoforte”, SADIE, Stanley(ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Vol. 19, New York: Oxford University Press, pp.655-695.
- PRAETORIUS, Michael プレトリウス、ミヒャエル  
2000[1619] *Syntagma Musicum II*, [郡司すみ（訳；編）『楽器大全 第2巻』、東京：エイデル研究所]。
- RUSSEL, Raymond  
1979[1959] *The Harpsichord and Clavichord: An Introductory Study*, London: Faber and Faber.
- 椎名雄一郎  
2019[2015] 『パイプオルガン入門』東京：春秋社。
- 白砂昭一  
2010[1966] 「クラヴィコード」、堀内久美雄（編集兼発行）『新訂 標準音楽辞典 アーチ』、東京：音楽之友社、pp. 544-545。
- 辻宏  
2007 『オルガンは歌う：歴史的建造法を求めて』東京：日本キリスト教団出版局。
- 辻紀子  
2007 「あとがき」、『オルガンは歌う：歴史的建造法を求めて』東京：日本キリスト教団出版局、pp. 197-201。
- 筒井はる香  
2020 『フォルテ・ピアノ：19世紀ウィーンの製作者と音楽家たち』、東京：アルテスパブリッシング。
- TÜRCK, Daniel Gottlob  
1789 *Klavierschule oder Anweisung zum Klavierspielen für Lehrer und Lernende, mit kritischen Anmerkungen*, Leipzig und Halle[テュルク、ダニエル・ゴットローブ、2000、東川清一（訳）『テュルク クラヴィーア教本』、東京：春秋社]。
- 渡邊順生  
2009[2000] 『チェンバロ・フォルテピアノ』、東京：東京書籍。
- 山野辺曉彦  
2007 「コラム：クラヴィコード」、伊東信弘（編）『ピアノはいつピアノになったか』、大阪：大阪大学出版会、pp. 39-50。
- 山本宣夫  
2007 「コラム：クリストフオリ・ピアノ」、伊東信弘（編）『ピアノはいつピアノになったか』、大阪：大阪大学出版会、pp. 39-50。
- 吉田実

松本奈穂子

1981 「オルガン」、下中邦彦（編）『平凡社 音楽大事典 第1巻』東京：平凡社、pp.348-362。